



企画展

木村素衛

もともり

—西田幾多郎に愛された教育哲学者—

平成29年10月17日(火)～
平成30年3月25日(日)

西田幾多郎から大きな影響を受け、戦後多くの教員に希望を与えた教育哲学者がいました。木村素衛(1895-1946/石川県加賀市出身)若くして貧しさや突然の病に苦しめられた彼は、失意の病床で哲学と出会い、西田幾多郎を師と仰ぎます。哲学・美学の研究に情熱を傾けながらも、師の勧めにより教育学へ転向します。苦悶のなかで教育哲学者となる木村ですが、モノづくりの思想を基盤にして独自の教育哲学を構築しました。同時に、信州の小中学校の教師たちからの要請に応え、熱心に教育現場へと講演に出向きました。戦後は、日本の教育再建の方向を指し示す、アメリカ教育使節団に対応する委員に指名されます。大いに期待されますが、昭和21年2月12日微熱をおして講演に向かった信州で、51歳を目前にして急逝しました。没後も信州の教員たちは木村素衛を敬慕し続け、現在でも長野県下には5つの彼の碑が大切に守られ、その思想が息づいています。雄大な信州の自然を愛した彼は、得意な絵や詩歌でその時々の情景を残しました。また、ささやかな日常の中にも美しさを見出す豊かな感性を持ち、ロマンチックな表現で日記や随筆を残し、時には恩師さへもユーモラスに描いています。幾多郎はこうした木村の境遇に同情し、また、その才能や人柄を愛しました。ふたりの師弟関係を見つめながら、「愛の人」木村素衛を紹介します。

色紙「かそけくも消え行く光 雪かそも白き雲片 安曇野に紫雲英咲く 畔に立ちひとり思へり われ死なばこの山見ゆる 野の末に葬れかしと」
(南安曇教育文化会館記念碑の詩、安曇野市教育会蔵)

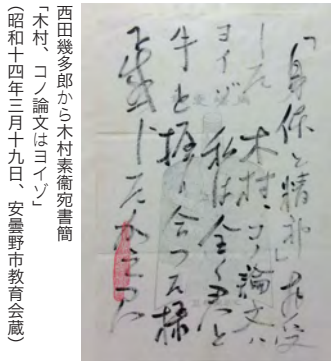
かそけくも消え行く光
雪かそも白き雲片
安曇野に紫雲英咲く
畔に立ちひとり思へり
われ死なばこの山見ゆる
野の末に葬れかしと



スケッチ(信濃教育会蔵)



写真 昭和十五年頃、娘のさつきさんを抱いて(信濃教育会蔵)



西田幾多郎から木村素衛宛書簡「木村、コノ論文はヨイソ」(昭和十四年三月十九日、安曇野市教育会蔵)



写真 昭和十九年頃、西田幾多郎と木村素衛

- その他展示資料
- 西田幾多郎講義の聴講ノート(信濃教育会蔵)
 - 『表現愛』初版の序、直筆原稿(信濃教育会蔵)
 - 『科学思潮』湯川秀樹と木村素衛の対談(昭和17年6月1日発行)
 - 木村素衛書「つゆ雨にけふるか山路師の逝きて幾日と思ふ眼のかすめるか」(安曇野市教育会蔵)
 - 西田幾多郎書「素心愛山水此日東南行笑解塵纒處滄浪無限清」(安曇野市教育会蔵)